

醫學管錐 外集

七

X  
18-2

490.9  
Ig-4  
11

No. 2052  
12 18-2



富士川支那

1264

醫學子管錐附錄卷七目錄

九折堂一田  
氏圖書之記

周易疾字

老婆乳汁出  
男子乳汁

世間有不可思議事

單甘草湯

讀方書說

膏藥

物茂卿說吐血手東

遊魂

麥飯不足脾胃虛弱者

麻黃升麻湯說

烏昧草

磁石

童便

紅花酒

寸白蟲

青魚

治病勿求速効

疥癬有陰陽附塗藥

臍瘡

治諸瘡瘍有上下之別

老人食少者壽

鼻淵腦漏

九味羌活湯治頭痛

鹿角治產後血暈及下血

病字

鼻息利

大病神氣療之者近死

發狂灸尾骶 奪食 紫根治停耳及頑瘡

誠文書

首間言不可無

周易疾字

醫學會編刊卷之二

未定

九味羌活湯



周易疾字

錦城先生曰久易中ニ疾ノ字アルハ、イツモ陰陽爻ノ變スル處ニテ云フナリ、陰爻ノ陽位ニ居ルカ、又陰爻ノ陽爻ノ上ニ乘タルナリ、何レ病ハ陰陽ノ錯亂ヨリ起ルユエナラン、莊子人間世ニモ、病ノコト陰陽之患トアリ、醫家ノ陰陽ヲ主トスルモコトハリナリ、又曰久豫ノ六五ニ、貞疾恒不死ト云フハ、痼疾ハイツモ病テ居レバ、急ニ死スルキツカイナキコトミテモ宜シ、貞ニ固必ノ義アリ、宋鄭汝諧ノ周易翼傳ニ、貞疾ハ、固疾也ト說リトソ、時還讀頃我書卷上

及門深海玄齋ハ篤學ノ士ナリ三十一年前余カ  
塾ニアルトキ余ニ語テ曰久周易上下經中ニ  
凡九ノ疾字アリ復彖辭ニ出入无疾豫ノ六五  
ニ貞疾恒不死无妄ノ九五ニ元妄之疾勿藥有  
喜遯ノ六三ニ有疾厲明夷九三ニ不可疾貞損  
ノ六四ニ損其疾蠱ノ九ニ我仇有疾豐ノ六二  
ニ征得疑疾兌ノ九四ニ介疾有喜イツレモ陰  
ノ陽ヲ侵ストキニ疾ノ字アルニ似タリ余其  
言ノ味アルヲ以テ記シオケリ此時時還讀我  
書ハダ世ニ出テズ後二十年許此說ヲ讀演テ  
深ク玄齋ノ精密ニ感レヌ惜ヒカナ其人早ク

歿ス憾グハ此說ヲ聞カシメザルヲ

老婆乳汁出

附男子乳汁出

舊藩長坂平十郎ノ母、年六十餘、孤孫ノ乳ナキヲ悲ニ、日々吾ガ乳ヲ乾喫セシムルニ、漸々乳汁出テ、竟ニ生育ヲ得タリ、又余ガ家婢ノ親族ノ老母モ亦シカリ、イヅレモ余ガ目睹スルトコロナリ、

業廣私說

後漢書獨行傳、李善字次孫、南陽淯陽人、本洞同縣李元蒼頭也、建武中疫疾、元家相繼死沒、唯孤兒續、始生數旬、而貲財千萬、諸奴婢私共計議、欲謀殺續、分其財產、善深傷李氏、而力不能制、乃潛負續逃亡、隱山陽瑕丘界中、親自哺養、乳為生

漣注音漣乳汁反也推燥居溼備嘗艱勤卷七十一

業廣按ルニ老婆乳汁出ルハ其理モアルベキナレ凡男子乳汁出ルハ李善ノ外イタ夕聞見セズイツレモ至精ノ致ストコロトハイヘ庄不可思議ノ事ナリ

世間有不可思議事

太宰德夫曰岡崎野見街有醫桂玄珉者其子被鼠咬手指而死明年其妻又死於鼠又明年玄珉又死焉東城伯通語余云此与家語所載齊人父子孫皆死於虎相類宇宙奇事也

紫芝園漫筆卷八

森立夫曰戊申ノ春正月十日勝瀬村ヨリ伊勢太太講ニ上ル人數凡五十二人ナリキ余モ講中ナリシカ伊勢ニ在テ同耕ノ簇屋某疫ヲ病ム陰證ニメ難治ナリケレハ村長等ト議メ十人ニテ療治シナカラ道中スルノニ決セリ夫ヨリ一兩日ツ、滯留數日ヲ經テ歸郷ス元來參附ノ緩證ニ

ヘ精神ハ明了ナレバ、睡中譖語ヲ發ス。其譖語始  
終白衣ノ婦兩人坐右ニ來リ侍スルトノミ云ヘ  
リ、富士山麓須走へ止宿ノ夜ハ、例ト代リテ、白狗  
ニ尾、牀下ニ走入タリトイヘルヲ、譖語ノ最後ト  
シテ、其後ハ絶テ譖語ナク、翌日猿橋へ止宿ノ夜  
ヨリ安眠シ、諸證共ニ平ニテ、其翌日勝瀬村歸宅  
ノ節ハ、渡口ヨリニ二町ノ道ヲ歩行ス、續テ快復  
セリ、然ルニ四五日前、道中ヨリ兩人先驅メ歸ヲ  
告タレハ、村内ヨリ兩人ノ者ヲ迎ヒトシテ出立  
ス、此者途中行違ヒニ沼津マテ出タリ、沼津ノ定  
宿ニテ尋レニ、昨日須走トマリノ由ニテ出立セ

シト告タレハ、其夜ハ沼津ヘトマリ、翌日須走宿  
ノ旅亭ヲ訪フミ、主人昨夜没セシトノ「ナリ」尤  
余カ須走ヲ出ル日、旅亭主人長髪ニテ風邪ノ由  
ナリガ、忽焉其夜死セレナリ、彼ニ白狗ノ牀下ニ  
入りシト譖語セシラ最後トシテ、篠屋ノ快復セ  
ルヲ想ヒ見レハ、全ク邪鬼ハ此地ヨリ去タルニ  
テ、其疫鬼ノ旅亭主人ニ傳染セレモノノ歟、ガル  
談話ハヨク人口ニ殘レル者ナカラ、余ハ信據セ  
サリシカ、自テコレヲ目撃シタレハ、奇怪ノ餘リ  
コニ錄レオキ又遊相醫詰

余が舊同藩ニ、三澤谷多トイヘルモノアリ、一

日左ノ眼中膜瞼ト。テ物ヲ見ニクケレバ、洗藥  
ナドシタル。自若ナレハ、眼科へ往テ診セレ  
ムルニ。茂早瞳子流レテ不治シト云フ。三四日  
ヲ經テ、其妻左眼盲シ、又三四日ヲ經テ、一子又  
左眼盲ス。皆前ト同シ、余リノ悲サニ。眼家四五  
人へ見セタルニ。瞳子流レテ不治シト云フ。同  
様ナリ。其證痛痒少シモナレ。十餘日ノ内ニ家  
内三人失明セリ。又舊旗下牛込ニ住セル久間  
某トイヘル人ノ嫡子、年十二三、竹馬ニ乘リテ遊  
ヒシニ、隣家ノ甥ニ竹ノ切ソギ<sup>タケ</sup>垣根トナレ  
タルドヘ落テ、一眼ヲ突キ失明セリ。一眼ナレ

バトテ、家督ノ出來ヌトニ「ハナケレハ、嚴レ  
ク竹馬ヲ禁スルノ事ミナラズ、大切ニ目ノ養生  
ヲナシタリ。其翌年同月同日同刻ニ、同シ場處  
ニテ遊ヒシニ、不圖蹶キテ、亦竹ニテ空レキ方  
ノ眼ヲ突キ、竟ニ盲人ニナリタリ。是並ニ余ガ  
目撃セルトコロニテ、稀有ノ事ニ、世ニ怪談奇  
說ハ、イカホドアルヘケレド、病ニ關係セザル  
モノハ置テ論セズゴ、ニニノ傳聞、及ヒ親  
シク目睹スルトコロヲ舉ル。シカリ。

家語正論解、孔子適齊、孔子適齊、過泰  
山之側、有婦人哭於野者、而哀夫子、式而聽

之曰此哀一似重有憂者使子貢徃問之而  
曰舅死於虎五口夫又死焉今吾子又死焉  
子貢曰何不去乎婦人曰無苛政子貢以告孔  
子子曰小子識之苛政猛於暴虎卷九〇按此文出於

禮記檀弓下

幼新書卷五附

惠文與王公同  
聖惠可攻

單甘草湯丸附

劉君廉夫曰案單味甘草湯功用頗多王公經治小  
兒撮口發噤用生甘草二錢半水一盞煎六分溫服  
令吐痰涎後以乳汁點兒口中千金方甘草湯治肺  
痿延喉多心中溫溫液液者又凡服湯嘔逆不入腹  
者先以甘草三兩水三升煮取二升服之得吐但服  
之不吐益佳消息定然後服餘湯卽流利更不吐也  
此類不遑枚舉也傷寒論輯義卷五少陰篇

又曰案本草甘草別錄云通經脈利血氣大明云通  
九竅利百脈寇宗奭云生則微涼炙則溫蓋四逆湯  
之治逆冷復脈湯之復失脈功端在乎甘草傷寒類

要傷寒心悸脈結代者甘草二兩水三升煮一半服七合日一服此單甘草湯其義可知耳

甘草湯注泄

又曰千金治食荅菪門亂如卒中風或似熱盛狂病服藥即劇飲甘草汁藍汁時後療食野葛已死者飲甘草汁但唯多更善外臺備急療諸藥名各有相解然難常儲今但取一種而兼解眾毒求之易得者甘草濃煮汁多飲之無不生也又食少蜜佳千金甘草湯主天下毒氣及山水霧露毒氣去地風氣瘡瘍等毒方甘草二兩右一味以水二升煮取一升分服

同卷

六菜中有水荅菪云云注五升

片倉元周曰甘草主治緩急和胃協和諸藥解百藥毒者人所知也然未知以此一品治他病凡小兒啼哭踰時不止者以二錢許熟湯浸絞去滓與之即止又初生芽兒咽喉痰壅聲不出者頗與生甘草如前法又傷寒經日不省人事譖語煩躁不得眠者每服五六錢水煎晝夜陸續與之神效此取本經所謂主治五臟六腑寒熱邪氣也其他癲疾發而搐搦上竄角弓反張者及嘔吐不止水藥入口即吐用半夏竹茹伏龍肝之類益劇者用此有奇效不可不知也

蠶探

劉君註庭曰孫真人曰凡服湯嘔逆不入腹者先以

甘草三兩煮取二升服之得吐但服之不吐益佳云  
云按此法甚驗

華治通義卷十二 嘔家服湯法

王亟經治小兒羸瘦用甘草三兩炙焦為末蜜九

綠豆大每溫水下五丸日二服

卷八

金匱要略治食牛肉中毒方甘草煮汁飲之即解

禽內獸魚虫禁忌并治

又菜中有水莨菪葉圓而光有毒誤食之令人狂亂狀如中風或吐血治之方甘草煮汁服之即解

同上

必效凡服湯嘔逆不入腹者方先單煮名甘草三  
小兩以水三升煮取二升服之得吐但更服不吐

益好消息定然後服餘湯則流利更不吐也

同外臺卷六

四十二

千金見卷十六

附後療食野葛已死者方飲甘草汁但唯多唯善

同卷三十一引

備急療諸藥各各有相解者然難常儲今但取一種而兼解衆毒求之易得者方甘草濃煮汁多飲之無不生也又食少蜜佳

同上

千金甘草湯主天下毒氣及山水露霧毒氣去地  
風氣瘴癘等毒方甘草二兩右一味以水二升煮

取一升分服

同上引

外臺秘要療羸劣老弱體性少熱因服石散而寒

氣盛藥伏。曾膈冷熱不調煩悶短氣欲死者藥既不行。又不能大便作害於人急宜吐之方甘草四兩生用右一味切以水五升煮取折半去滓令頓服之當大吐藥亦與病俱去便愈矣夫散家患心腹痛服諸藥不差者服此甘草湯諸膈即通大便亦利甚驗卷三十八

千金方解食毒第一治食牛肉中毒方水煮甘草汁飲之卷二十四

又解百藥毒第二百藥毒甘草、芫花毒甘草野葛毒甘草汁、茛菪毒甘草、治食茛菪悶亂如卒中風或似熱盛狂病服藥即剝方飲甘草汁

金方治小兒驚癇卷五下  
方甘草五兩末之蜜  
凡日三服盡即更合  
引千金同外臺廿五

藍青汁即愈同上

醫說小兒陰囊忽虛腫痛以生甘草湯調地龍糞糞輕塗之卷六

中藏經甘草湯解方藥毒甘草一十二兩右件剉碎水二斗煎至一斗取清溫冷得所服仍盡量服卷下

萬病回春懸癰者此瘡生於谷道外脣之間初發甚癢狀如松子四十日赤腫如桃遲治則破而大小便皆從此出不可治矣宜國老湯用橫紋大甘草一兩截長二寸許取出山澗東流水一碗不可用井水河水以甘草蘸水文武火慢炙不可急性

須用三時久水盡為度、劈鬚草中潤透却以無灰  
酒二碗煮至一碗溫服半月消盡為度。卷四

讀方書說

劉君謹庭曰、清醫楊西亭トイフ者、文政ノ初、崎魯  
ニ來寓セレガ、頗學術アリテ、識見モ亦卓ナリシ  
ト、其言ニイヘラク、醫ハ時運ニ隨テ、治ノ異ナル  
ニアリ、徒ニ紙上ニ拘ルヘカラス、書籍モ七八葉、  
ノウチ、有用ノ處ハ、一葉ニ足サルニ、大抵前人一  
家ノ說ヲ主張セントスルユヘ、空談多キトニハ  
ナリヌ、然凡何レ書ニ就テ、思索セズシハアルヘ  
カテズ、又病ヲ治スルニ、頭ヲ見テ頭ヲ治スルハ、  
庸工ノ所為ニ、能病因ヲ尋テ、首ノ病ヲ足ニテ治  
シ、下ノ病ヲ上ニテ治スルヨリ、良醫トイフベケ

レ、此等ノ言ハ平近ニメ、吾人ノ知トヨロナレ凡、  
其異ヲ好ニザルコソ、卓識トイフベケレ、沼津ノ  
醫生武田克巳ナルモノ、西亭ニ會晤セレトテ、予  
ニ語リ又、時還讀我書卷下ミテ、

徐靈胎曰、仲景之學、至唐而一變、仲景之治病、其  
論藏府經絡病情傳變、悉本內經、而其所用之方、  
皆古聖相傳之經方、並非私心自造、間有加減、必  
有所本、其分兩輕重、皆有法度、其藥悉本于神農、  
本草、無一味游移假借之處、非此方不能治此病、  
非此藥不能成此方、精微深妙、不可思議、藥味不  
過五六品、而功用無不周、此乃天地之化機、聖人

此四行、厚生

立數方、亦有一方  
而

之妙用、與天地全不朽者也、千金方則不然、其所論  
病、未嘗不依內經、而不無擇以後世臆度之說、其所  
用方、亦皆採擇古方、不無兼取後世偏雜之法、其所  
用藥、未必全本於神農、兼取舊方單方及通治之品、  
故有一病而治數病、其藥品有多至數十味者、其  
中對症者固多、不對症者亦不少、故治病亦有效、  
有不效、大抵所重、耑在于藥、而古聖製方之法、不  
傳矣、此醫道之一大變也、然其用意之奇、用藥之  
巧、亦自成一家、有不可磨滅之處、至唐王燾所集  
外臺一書、則纂集自漢以來諸方、匯集成書、而歷  
代之方、於焉大備、但其人本非專家之學、故無

所審擇以為指歸乃醫方之類書也然唐以前之方  
賴此書以存其功亦不可泯但讀之者苟胸中無  
成竹則衆說紛紜羣方淆雜反茫然失其所據故  
讀千金外臺者必精通于內經仲景本草等書胸  
中先有成見而後取其長而舍其短則可資我博  
採之益否則反亂人意而無所適從嗟乎千金外  
臺且然况後世偏駁襍亂之書能不惑人之心志  
哉等而下之更有無稽杜撰之邪書尤不足道矣  
醫學源流論卷下千金方外臺論

又曰人之死誤于醫家者十之三誤于病家者十  
之三誤于旁人涉獵者亦十之三蓋醫之為道乃

通天徹地之學必全體明而後可治一病若全體  
不明而偶得一知半解舉以試人輕淺之病或能  
得效至于重大疑難之症亦以一偏之見妄議用  
藥一或有誤生死立判矣間或偶然倖中自以為  
如此大病猶能見功益復自信以後不拘何病輒  
妄加議論至殺人之後猶以為病自不治非我之  
過于是終身害人而不悔矣然病家往往多信之  
者則有故焉蓋病家皆不知醫之人而醫方寫方  
即去見有稍知醫理者議論鑿々又關切異常情  
面甚重自然聽信誰知彼乃偶然繙閱及道聽塗  
說之談彼亦未嘗度從我之說病者如何究竟而

病家如何究竟而病家已從之矣、又有文人墨客及富貴之人文理本優、偶爾檢點醫書、自以為已有心得、傍人因其平日稍有學問品望、倍加信從、而世之醫人、因自己全無根柢、辨難反出其下、于是深加佩服、彼以為某乃名醫、尚不如我、遂肆然為人治病、愈則為功、死則無罪、更有執一偏之見、恃其文理之長、更著書立說、貽害後世、此等之人、不可勝數、嗟乎、古之為醫者、皆有師承、而又無病不講、無方不通、一有邪說異論、則引經據典以折之、又能實有把持、所治必中、故餘人不得而參其末議、今之醫者、皆全無本領、一書不讀、故涉獵醫

書之入、反出而臨乎其上、致病家鄙薄醫者、而反信夫涉獵之人、以致害人如此、此其咎全在醫中之無人、故人人得而操其長短也、然涉獵之人久而自信益真、始誤他人、繼誤骨肉、終則自誤其身、我見甚多、不可不深省也。同六十七  
醫書誤人論

業廣嘗テ以為ラク方書浩翰、茫然ト、讀過スレハ、ダトヒ萬卷ヲ、讀破シタリトモ、終ニ其要領ヲ得ル、ノ能ハズ、到底一卷中ニ擇テ取ルヘキモノ、十中ノ一一過ギズ、宋元以還ノ方書ヲ讀ムニ、譬言ヘハ布帛肆ニ至リ、數十百端ノ衣服ヲ、檢スレハ、意亂目眩シ、竟ニ適從スルトコロヲ

知ラザルが如レ、因テ亥フ、方書ヲ讀ムノ法、コ  
レヲ律スルニ、仲景ノ方法ヲ以テシ、其他ハ後  
世ノ溫膽敗毒、四君子、六君子、大補益氣歸脾、養  
榮三和、七氣、四物、八物等、常套用ルトコロノ効  
驗方若干首ヲ、紀綱トナシテ、然後ニ看過スレ  
ハ、徃々奇方明論ヲモ、探リ得ヘキノナリ、若徒  
ニ博ニ驚、奇ニ趨リ、多キヲ貪ルノミテハ、大海  
ニ出テ、茫茫タルガ如久竟ニ其要領ヲ得ル  
ト能ザルナリ、余常ニ此說ヲ持シテ、方書ヲ讀  
ムノ規則トナシタルニ、近日諸書ヲ閱ルニ、前  
人已ニ言ヒ及スモノアリ、余ガ宿志ト暗合ス

ルヲ喜ビ、茲ニ舉テ攷ニ備フト云ス

膏藥

南史四十二、齊高帝諸好驥三疑薨後忽見形於沈文季子曰我未應便死皇太子加膏中十一種藥使我癰不差湯中復加藥一種使利不斷吾已訴先帝

膏藥ニ十一種藥ヲ加フトアルカラハ一體膏

藥ト云モノハ多味ナルモノカスヘテ煎藥ヲ

ハシメ何ノ方ニテモ藥味幾種位ノモノニヤ少キカギリ多キカギリ御指南可ル下候

但亡魂ノヲナレハ興寢ノヲニモ有之マジク候ヘトモ奉伺ハ

明治八年乙亥二月廿八

岡本保孝

答

陶弘景本草經序例、可服之膏、膏津亦可酒者、飲之可摩之膏、膏津則宜以傳病上、

古ハ膏ヲ服シ、又身體ヘスリツケタルモノノすリ、金匱要略ノ頭風摩散モ、頭上ヘスリツケタルヤウナレド、主治脱スレハ詳ナラズ、千金卷九ニ傷寒膏三方アリ、翼方卷十六ニ諸膏三方ヲ載ス、イツレモ、猪脂ニテ製レタルユヘ、膏レモ、コレハ稀ニ後世ノ膏藥ハ、多イツレモ、四クハ麻油ニテ製レタルモノノ、五味ヨリ、十味以上ナリ、醫心方外臺ナドニモ、數方アリシカト存レ申候、藥味ノ多寡ハ定リ

ナレ、畢竟今時ノ膏藥ノ如ク瘡瘍ヘノミ貼シテ、服スヘカラザルモノト異ナリ、南史ニ、雍トアレハ、今時ノ膏藥ニ類シタレモ、スリツケタルモノニテ、今ノ薄貼スルモノニハアラザル、欵ト覺ヘ申候、今ノ製衣ハ、明以來ノノニテモアルベシ、其初ヲ審ニセズ、劉君證庭ノ藥治通義卷九ニ說アリ、乃御覽見ニ入レ申候、

煎藥モ、仲景ノ方ハ、一味ヨリ十餘味一デヲ限リトス、唐ヨリ以降ハ、一二味ヨリ、五十味七十味百餘味ナルモ、多ケ有之候、

右明治下問ニ舟申上候

山田業廣

明治八年三月一日

山田業廣

物茂卿論吐血手東

當与本集卷

人尿

主屋ハ少壯遠志なれば甚黒は堅固に生の主屋  
主屋主多居し、愚拙主多居て有りが夫也あ  
シ恩召のうち、

一玄固去以吐血亦烦少由少私念性少少制多  
心元而少打散之氣味少色少少自己小便少留少  
色少物多多少少度少令清多大吐血某法多効  
主方之療治多早速肢平復少主之上ヶ多少根  
恙少而少用少少主少少停都りく仕少少法全性少由  
法多柔少少通承少少ば少少固井郡大主少將事多吐血  
少煩苦多少止少少主少手足心熱不除痰唾中血線

除うべし。量も用ひず、一括も手足心地全除血  
も全く絶ゆ。焉と聞い。アハ餘残也をひき、少申  
させり我ちなし。奇妙なるものあり。上へ。

七月二十四

省あ院様

荻生あなた様

右手東原曲蘆済家直ある不岡良良節購  
て余示す。因て布集章使人尿條ふ戴る所の  
参考に備る。茲小刺ちものあり。

明治九年十一月三日

桂庵識

### 遊覧

蘭軒翁嘗曰。一士人病疫。昏瞀不省。已至危殆。一夕  
諸醫會議。親戚預焉。茗菓酒肴陳席上。與病人所寢。  
相隔三室。士人病愈後。談其夜別室會人。并茗菓酒  
肴。迄位次器皿。毫無差忒。彼不能自悟其理。而聞者  
無不怪異焉。蓋所謂遊覧之所為歟。

此事在四十年前。先生夜話之所及。偶記得之。因  
錄以廣異聞云。文久癸亥八月初九。昌平直樓書。  
枳園森立之。

日下部景衡が老談一言記に曰。小瀬復庵順元  
いふ。加州の家人青地蔵人。先祖青地四郎右  
道體

情づけうき時の夢小、朝鮮は泣りし所と歴  
と見てめつてしきてことて、夢覚て後、川り  
ふう山河の圖をぞくやうふうつて、枕屏風  
とあへた。十年以後はふ、朝鮮軍の可なり  
て、青地に彼北へ趨くつしが、ろめつて、もす  
アソあうねと、昔夢るゝ而小似ひるす、やあ  
る、試ふのためえと、うきの屏風の條を引もあ  
ら、おひて、アソふ、がもこうふ所あ、だ、す  
い、うらと、あはり、うらと、思へ、川を、  
又、い、うれりて、山うらと、とあふ、山うらも  
うし、まこと、ふ、うりて、大うれし所とも

うふし、諸々、夷夏」と、ふ、今、まぢう、敵小を圖  
やうるどと、ふ、い、かや、あ、う、ん、そ、の、圖  
と、見、あ、か、あ、と、ふ、業廣謂お、山亦遊、  
の、次、欲、因、る、あ、ふ、附、載、せ、

麥飯不<sup>可</sup>脾胃虛弱者

香川太冲曰、大麥雖性味輕淡、而粗糲骨碌、非病人所可食、且此物雖內柔而外面皮硬、難速化、故平人宜食、胃弱之人勿食、一本堂藥選

和田東郭曰、脾胃大ニ虛損スル者、又極虛ニ至ラサルモ、シハク下利スル者、ハ、麥飯ニヨロシカラス、陳倉米ナトノ味至テ淡キモノヲ、一合或一合五勺ハカリヲ、稀粥トナレ、斟酌シテ、一日ノ食トスヘシ、是亦一手段ナリ、尊水瓊言

按菽麥小豆等、皆消導ノ品ナレ、八滯食水腫脚氣ノ類、疏通ニ<sup>可</sup>シキ證ニハ、効アルト勿論サ

ナレニ、近日脚氣専門ノ醫家、ソノ虛實ヲ辨セ  
ズ、概メ麥飯小豆ノミヲ喫セシメ、徃々大害ヲ  
招クヲアリ、慎マズンハアルヘカズ。

五 萬病回春、婦人氣血方盛、乳房作脹、或無兒  
飲、脹、痛、增寒、發熱、用來タ芽ニ三兩、炒熟、水煎  
服、立消、其耗散氣如此、何脾胃虛弱、飲食不消、

方中多用。

卷六

杏川太中曰、大麥華、根、葉、梗、外皮、枝、頭、人  
參、薑、不、可、謂、胃、藥、者、

麻黃升麻湯說

本集卷十 古方 不可  
思議條互參看

辻元山松翁曰、弱冠ノ頃、片倉鶴陵ニ逢ヒタルト  
キ、鶴陵謂テク、足下麻黃升麻湯ハ、イカ、心得タ  
ルヤト問フ、柯琴ノ說ニ、後世粗工之伎、必非仲景  
方トイベハ、桂山先生ノ輯義ニモ、其說ヲ用ヒテ  
レタルハ、後人ノ攢入スルトコロナシテシト答ヘタ  
ヒ、鶴陵云フ、左様ノ心得ニテハ、終身高手ニハ  
ナル、ジト覺ユ、タトニ誰ガ言タリトテ、其說ノ  
ミヲ黒守レテハ、發明ト云フハアル、ジト云ケ  
レハ吾其言ヲ深ク心ニ銘シタルニ、七十餘ニナ  
リテモ、此方ヲ用ルヲ能ハズ、アルトキ、福山侯ノ小

大ノ乳母、疫ノ劇忘ニテ、下宿レタルヲ診レタル。尋常ナレハ、益元既濟ニテモ投スヘキナレ也。逆モ必死ノ容子且ツ卑賤ノモノナレハ、他醫掣手肘ノ患モナケレハ、膽ヲ放テ、麻黃升麻湯ヲ投シタルニ、其神効アリシ。實ニ筆舌ニモ盡レ難キ位ナリ。仲祖ノ神方ナルノハ言フ迄モナク、鶴陵ノ卓識、實ニ感服ニ堪ヘザルノナリ。

本草綱目卷之三十一

七

山

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

草

本

葉孟蜀本草本草自廿二疊等之餘夾之又  
人子食之「宋元祐鑑」復之十卷之草子  
舊同翻校山主曰施鑑入伊ニ白相草子今山子  
鳥相草

### 磁石

蘭軒先生曰劉桂山東巖山ノ僧ノ男色ニテ腎部  
虛シタルモノヘ徃々八味丸料ニ磁石ヲ加ヘ治  
シタルヲアリトイヘリ

醫方攷磁石火內煅紅入醋淬七次為末入藥古  
人於腎虛腰痛方中每用磁石時方多不用之然  
磁石性能引鐵則用之者亦是假其引肺金之氣  
入腎使其子母相生爾水得金而清則相火不攻  
自去矣嗚呼醫國之神妙在於幽微此言可與知者  
道也、卷三

按ニ古人虛勞耳鳴ニ磁石ヲ用ユルヲ多ニ本  
稿

事方卷五ニ、治男子二十歳、因瘡毒後腎經執右耳聽事不真、每心中不如意、則轉覺重、虛鳴疼痛。地黃湯、生乾地黃、桑白皮、熟石斛、梔子、羌活トイヘルニ據レハ、徽毒ナドヨリ來レル耳鳴ニモ、宜シカラシ次、徃年河内屋源兵衛トイヘルモノ、虛勞耳鳴ニ、養榮歸脾ノ類ニテ、本證ハ畧差タレド、耳鳴ハ終ニ愈ス、當時破石ヲ用ヒザルコトノ今ニアリテモ遺憾ナリ。

童便 本集卷七 當參看

津田玄仙曰、凡諸病真寒假熱ノ證ニハ、必桂附ノ齊<sup>ツキ</sup>テナケレハ十ラズ、煎藥ノ服法ハ、諸書ニアル通り、冷服スルヲ、萬世不易ノ法ナリ、若此證ニ熱服サスルオハ、其病證ノ真寒ト、桂附ノ熱氣ト相争ヒ相搏テ、反テ病勢ヲ増<sup>ム</sup>ノモノナリ、然レバ、此證内カ冷ル故、得テ極熱ノ飲食バカリヲ好ニテ、冷物ヲ多クハイヤガルモノナリ、人法ノ如ク藥湯ヲ押レテ冷服サスレバ、忽チ嘔吐ヲ生シ、又好ミニ任セテ熱服サスレハ、假熱ノ證<sup>ム</sup>長シテナラズ、何ニコノバニ於テ、シアーストアリ、其時ニハ、

人尿ヲ中蛤ニテ一ツ程、煎湯ノ中エ入ヒ又煎ズ  
ルノ一沸レヤハリ其好ニ從テ、熱服サスペシ此  
通りニスレバ、服法ニモ背ズ、病人ノ情志ニモ從  
ヒ、宣モナサズ、萬全ノ良術ナリコレ傷寒少陰篇  
ノ白通加人尿猪胆汁湯ノ意ニシテ、陰物ノ人尿  
ヲ假テ其真寒ノ陰邪ト一和セレムルノ義ナリ、  
茶談卷一サエノオ

卷一  
齊天子  
宋因支山曰、善病真寒則虛人之體也、故對此人  
童更本集著之、當參看。

### 紅花酒

蘭軒先生曰、紅花ヲ袋ヘ入ヒ、熱酒ヲ以テ漬シ、泡  
藥ノ如クレテ、寒温ニ適シ、コレヲ飲シム、金匱紅  
藍花酒ノ主治ノ如久血氣痛、又月信痛ナドニ、奇  
効アリ。

金匱要略、婦人六十二種風、及腹中血氣刺痛、紅  
藍花酒主之、紅藍花酒方、紅藍花一兩、右一味、以  
酒一大升、煎減半、頓服一半、未止再服。卷下婦人雜病  
醫方考、紅花酒胞衣不下、此方主之、紅花一兩炒  
清酒五爵、沃之溫服。卷六婦人門

無名氏日記俗小筋脚氣といふを治む極寶を人らまれハ世帯のみヲ物語ヘ又モ二三  
人の物と下りて  
愈治江室所ノ解  
云ねりもに

寸白蟲 本集卷八榧子治寸白蟲條當參看

後藤先生帳中遺稿曰、腹内生細長蟲如平麵線每寸有節、俗呼寸白蟲、或呼痴蟲、外出則陰囊展大、入則少腹急脹、若失行路、幸下肛門、則當自以杖子捲取之、有二三丈或八九丈者、必根治焉。療治茶談四編引

本書未見

津田玄仙曰、予モ亦コノ長キ虫ノ、肛門ヨリ下リテ、痴氣ノサツパリト治レタルヲアルヲ見タリ、予カ見タル處ノ虫ノ形ハ、其色ハ青菜ヲ水ニ入テモミタル莖ノ如久、長サハ肛門ヨリ出ル处一丈餘モアラン、マタ手ヲ以テイダサンニハイカ

ホドモ出ツベキト思ハル、然レバアマリ氣味ワ  
ルクアリケル故ニヨキホドニ引キキリテシニ  
イタリ、其後モ大便後ニコノ長虫出ルトニ三度  
アリケル、後ニハナシ、故ニ手ニテタグリ出レケ  
ルニ、皆イツレモニ丈バカリモアルベキモノナ  
リ、コレヨリシテ、其人痴氣ノ持病、イツヨキトモ  
ナシニ全快シケリ、是後藤先生ノ說證明ナルモ  
ノナリ、同上

原南陽曰、古書ニ三蟲ト云ハ、蛻虫、寸白蟲、蛲虫也、  
世ニ痴氣寸白ト並言、此地俚言ニサヘリ虫ト  
云モノ、寸白虫也、本事方曰、寸白虫、先食豬肉一片、

乃以砂糖水、調黑鉛灰四錢、五更服之、虫盡下、食白  
粥一日、許學士病嘈雜、服此下二虫、一寸斷、一長二  
尺五寸、節々有斑文也、ト見ニ、其狀平タクテ長ト  
ハホトノ知レヌモノ也、丈餘ニモ及、色白テ紫點  
紋アリテ節ヲナス、之ヲ下トキ、隨分大事ニ物ニ  
カテミテ引出セバ、切レ易久、切レハ乍ニ肛門ヘ  
縮入、腰中冷痛ヲ患テ、痴ト云人、之ヲ下レテ治タ  
リト聞ケモ、予ハ未目擊、彼虫ヲ下スウハ、時々見  
聞モレタリ、余モ壯時之ヲ下スニ、半ニテ引切ニ  
日ヲ經テ又下ル、靜ニ引出スニ、其末ト覺えタル  
ハ、殊外細ク尖タリ、下ルノ前後、何ノ異ナルモ

不覺之ヲ下ノ藥ハ未學、艾凶湯ニテハ不下、或傳  
フ、竹シ皮ヲ幕也嚴酢ニ浸フ、一日夜、黑燒ニレテ服  
スレハ、下寸白虫、如教スルニ無驗、然此證候有寸  
白虫ト云看法モ不知レハ、其虫ノ無キ人ニ用タ  
ルヤ、誠癡人ノ夢タノ說ニ齊シ、醫事小言卷三  
又曰、田間ノ人、濁酒ヲ飲故、此虫多ト云フ、果レ  
テ然ルヤ未知、同上

有持桂里曰、一友人曰、有蟲ハ、榧子實ヲ食ハシム  
ルヲ良トスト、近ゴ尺方書ヲ點檢スルニ、其說ア  
リ、左ニ錄レテ聞見ヲ廣ム、治寸白蟲方千金卷  
榧子四十九枚、去皮以月上旬平旦、空腹服七枚、七

按景岳全書曰云、治寸白虫、無如榧子煎、其效如神。

卷三十五寸白  
虫條六十六

七盡虫消成水、永瘥、方懊軼、榧子煎

景岳全書卷五十四治

寸白蟲化為水、細榧子四十枚去殼、以砂糖水半盞、用砂

鍋煮乾、熟食之、每月上旬平旦、空心服七枚、七日服

盡、虫化為水、永瘥、幼幼集成卷之四、癖積門云、小

兒好食茶葉成癖、用鮮榧子一觔、空心午前、黃昏、每

服十四粒、喫完即愈、榧子、京菓舗有賣、方懊軼

余ガ妹婿復目彌三郎ノ兄堀越守藏トイヘル

モノ、舊幕府ノ頃、御代官手代ノ勤タルト云ヘル

ニヨリテ、飛彈國へ往キレニ、其國ハ寒國ニテ、

夏月モ日暮暮ニ至レハ、寒冷ヲ覺フ、冬ハ香ノ物

水リテ食フ、能ハス、炙リテ食フボドナリ、寒

國ニヘカ、幼年ノモノト雖、皆酒ヲ嗜ム、俚諺ニ  
飛彈下戸一升ト云フ位ナリ、寸白虫ノワクモ  
ノ甚多シ、ナダムレト云ア酒客ハワケテ甚シ、又淋  
病ヲ患ルモノモ甚多シ、右守藏話スルトコロ  
ナリ。

青魚

蘭山曰、青魚詳ナラズ、本邦ニテサバノト云、青  
魚或ハ鰯ト書ス、故ニ和名鈔ニ、鰯ヲアラサバト  
訓ズ、然レドモ是ニアラズ、サバハ清俗青花魚ト  
イフ、朝鮮ニテハ、カドヲ青魚ト云ユヘニ、東醫寶  
鑑ニ領ノ說ヲ引テ、下ニ非我國之青魚也ト云リ、  
本草啓蒙卷四十

大淵君棟軒祐玄曰、青魚ハメナダナリ、野必大ノ  
著ニ、或說ヲ引クモノ、從フベレ、

野必大本朝食鑑卷八  
鰯條附錄ニ、女那多魚狀  
全与鰯同而大者也、海俗所謂老鰯魚、又曰、鰯類

而別一種也、其大者六七尺、及丈餘、鱗鰭硬大、背青於鯔、味極甘美、多脂勝于鯔、生食者食俱好、多子滿腹、漁家稱鯔有子者、悉女那多之種也、是似有理、諸腸可食、臼亦大而佳、江東多有芝江亦米之此亦勢州海濱、最為絕勝、或曰、此華之青魚也、鮀骨如琥珀狀大、味美、可謂五侯之鯖者乎、然未ト詳之、

青魚  
門入水ノナツノ良ニテモ天仕代ハ青谷音赤魚イ  
魚玄ハ鯔ナシ吉大姑ニ味名鑑ニ論テモサセハ十  
蘭山曰吉魚善ナミス本社ニテヤハシモ十日青

### 治病勿求速効

花林壽庵曰、治療ノ大法、兜角セリツクハアシキナリ、セリツケハ迷ヒモ生レ、無理モ出來ルモノナリ、壽庵京師ノ人ニテ、年七十餘、東京ニ來リテ、下谷ニ住ス、業廣、年廿五六ノトキ面會シタリ、老功ユヘ頗ル面白キ咄アリ、コレハ天保ノ頃ニテ、今ヲ去ル、四十一年ニ近シ、  
吉安府志、王昂曰、醫酉以輔養元氣、非與疾求勝也、夫與疾求勝者、非味雜辛烈、性極毒猛、則得效不速、務速効者、隱禍亦深、吾寧持久緩、而待其自復也、

醫術列傳卷十三引

疥癬有陰陽附金藥說

香月牛山曰、小瘡ナドヲ病デ、外ヨリキビシキ貼  
藥ヲナレ、或ハ沐浴レナドスレバ、其瘡内ニ入リ、  
其毒内ヲ攻ム、喘急甚久、遍身浮腫スルヲ多シ、荆  
防敗毒散ヲ用テ發スレバ、其瘡外ニ出テ腫消ス  
ル也、又ハク心氣飲ヲ用ユルモ宜レ、熱ツヨク甚  
キ者ニハ、防風通聖散モ可也、其内ニモ、虛實ヲ辨  
メ治スベシ、皮膚ノ氣虛メ、小瘡ノ毒發スルヲア  
タワザル者アリ、是ニハ補中益氣湯ニ、羌活獨活  
連翹ヲ加テ用ヨ、其効如神、卷中水腫  
又曰、疥癬ハ、分テ云バ、疥ハ皮膚ニアリテ、浮淺ナ

リ多ハ熱ニ属ス、癬ハ深沈ニメ、多ハ濕ニ属ス、故ニ痒クメ濕ナク、班赤点ヲ生ズル也、癬ハ痒メ血膿アリ、共ニ血熱ノ症也、血分熱燥メ、風毒ヲ挾ム也、和俗ノ云フ肥<sup>セ</sup>癬瘡也、初發ニハ、荆防敗毒散ヲ用テ發散スベシ、久キ寸ハ、荆防敗毒散ニ、四物湯ヲ合シ、酒芩<sup>ク</sup>酒連ヲ加テ用ベシ、年疥癬ニハ去熱搜風湯<sup>回春本経</sup>ヲ用ベシ、年久キニハ、防風通聖散ニ宜シ、卷下疥瘡癬瘡。

又曰、風疥癬ニハ、去熱搜風湯<sup>回春本経</sup>ヲ用ベシ、同又曰、皮膚鱗ノ如ク立テ、痒キ者ニハ、浮萍散<sup>回春本経</sup>ヲ用ヨ、同上。

李時珍曰、營宮實舊微根、能入陽明經除風熱、濕熱生肌殺虫、故癰疽瘡癬、古方常用、  
千金方治凡有瘡疥、腰胯手足皆生疵疥者方、薑薇根、黃連炒藥雀李根皮、黃檗各三兩、石龍芮、苦參、黃耆、黃芩各二兩、大黃當歸續斷各一分、括樓根四兩、右十三味末之蜜丸如梧子以薑薇飲服二十九日三加至三十九、瘡疥差乃止、乾疥白癬勿服、卷廿三疥癬第四<sup>サラウ</sup>。

巢源三十有乾癬候、溫癬候、白癬候、乾疥候、溫疥候、當改、  
醫方攻疥瘡門、防風通聖散、方畧<sup>不載</sup>、下玉燭散、川芎、當歸、生地黃、赤芍藥、當歸養血湯加防風連大黃、甘草、朴硝各等分、當歸養血湯加防風連翹、當歸防風各一錢、黃蓍五錢、連翹二錢、黃十全大補湯、參苓白朮散等、宜參改、卷六。

又加品、古方有用苦參、沙參、忍冬花、皂角刺者、此

皆治瘡善藥、若依前法、則此輩不用亦愈、必欲用之、苦參宜用酒炒、同上

業廣嚮ニ疥ニ陰陽アルヲト覺ヘシ後陽ニ属スルモノハ、荆防敗毒散、或四物湯ヲ合シ、或ハ苦參ヲ加ヘタル「アリ、陰ニ属スルモノハ、ハ物湯、大全大補湯、或ハ鹿角末ヲ兼用、鹿角甘草以白湯送下、味岡野又七郎トイヘルモノ、疥ヲ患ル、累月形體羸瘦、盜汗出ツ、脉細數ナリ、補中益氣湯ヲ用ルニ、勞狀ノ愈タルノミナラズ、久患ノ瘡、一處ニ聚リ、膿汁出テ、全快セリ、老人ノ久疥ニ、荆防ナドヲ、プラク用ヒ、漸々津液枯

燥シテ斃ル、ニ至リシモノノヲ、三四人目撃テレテ、臍ヲ噬レトアリ、又痛劇レク、晝夜呻吟セシモノニ、荆防常套ノ割ヲ與フルニ、一醫ノ黃連解毒湯ニテ、速効ヲ得レト見タリ、コレニテ益く疥ニ陰陽アルヲ悟リヌ、孫真人ノ乾疥白癬ハ勿用ノ語、體認スヘキトナリ、近頃濟生ノ當歸飲子ヲ屢用ルニ、細粒ノ瘡、膿ヲモチテ、大ニ効コ奏セレ一度、ナリ、又按ニ疥瘡粒大ニメ、勃々貌豆瘡ノ如キモノ必痛多ク痒少シ、此發レ易ク愈易レ、蓋陽ニ属スルナリ、其蚊迹蚕斑ノ如ク、細瑣ナルハ、必痒

多ク痛少シ此發シ難ク愈難レ蓋陰ニ属スル  
ナリ諸瘡瘍用后半金等ニ漏蘆湯五香連翹湯  
アルヲ觀ルニ漏蘆ハ陽ニ属シ五香ハ陰ニ  
属スル欵ト覺ニ茲ニ知ル疥癬ノ小瘡トイヘ  
ニ陰陽アルト甚明ナリ

### 附塗藥說

醫方攻古方塗藥有用蛇床子川椒雄黃樟腦水  
銀樟榔者有少入人言者皆殺蟲也有用木鳖子  
大風子者皆去風也有用枯礬硫黃者為燥濕也  
有用大黃黃柏輕粉鉛粉黃丹者為解熱也或以  
柏油塗者或以麻油塗者或以猪脂塗者予少時

常自用之率驗於此而違於彼今月少愈再月即  
發竟以服藥而瘳終無益於塗也然病淺者間有  
塗之而愈故塗藥亦所不廢卷六疥瘡金藥  
總考

按ニ小瘡內攻ハ畏ルヘキモノナリ傳藥浴湯  
ニテ内攻スルモノ鮮カラズ漢人ハ言ヒ及ボ  
スノ稀ナレニ目今ニテハ吾人皆目撃スルト  
コロナリ濟生ノ赤小豆湯主治ニ治年少血氣  
俱熱遂生瘡疥變為腫滿或煩或渴小便不利味  
豆當歸商陸澤漆連翹仁赤芍藥漢方杞木コレ  
猪苓桑白皮澤漆各半兩熟地者加犀角、木コレ  
モ自然瘡疥ヲ生シタルニテ傳藥浴ナドニテ内  
攻シタルニハアラズサレド今ハ内攻ノ治ノミ

ニ用ニ、山脇東洋ノ赤小豆湯モ効アル方ナリ。  
赤小豆商陸連翹蝮蛇先年京師ヨリ來リシ門  
肺便叔名大黃便叔名大黃商陸澤鴻ヲ加  
人ノ傳ニテ、麻黃連翹赤小豆湯商陸澤鴻ヲ加  
テ用ルニ、大ニ効アリ、イソレ濟生ノ方ヨリノ思  
ニ付ナラン、後ニハ犀角ヲ兼用シタルトモア  
リ、備急圓ニテ一下メ後コレヲ用テ速効ヲ取  
リシ。アリ、近年ハ、ゴノ方ノミヲ用テ、常用ノ  
方トナシヌ。

臘瘡

香月牛山曰、臘瘡和名雁瘡ト云ハ月ヨリ發ニ、二  
月ニ愈ヲ以テ、此名ヲ呼也。啓益元禄九年八月十  
四ノ夜ノ五更ニ、夢中ニ白衣ノ神來リ告テ曰、汝  
臘瘡ノ治シカタキニ、エ夫ヲカモス荆防敗毒散  
ノ痣アリ、白芷升麻湯ノ痣アリ、ニ方共ニ効アリ、  
但シ雁來紅○アヤハヒ、青葙子ノ條ニ出テ、甚功能ヲシリ  
サズトイヘニ、青葙ノ種類ニテ、其功能青葙ニヒ  
トシカルベシ、青葙ノ主治、邪氣皮膚中ノ熱ヲ解  
シ、風瘡身癢疥癬惡瘡ヲ治シ、三蟲ヲ殺シ、金瘡ノ  
血ヲ止トアレバ。○本綱卷十此物葉ノ色鮮紅ニ

○アヤハヒ  
夢見テ、本綱考  
ルニ、雁來紅

メ、血分ニ入り、雁來ノ節紅ナルヲ以、臍瘡ヲ治ス  
ルノ妙アルベキト、疑惑スヘカラズ、實ニ神人ノ  
靈通タルヲ知テ、臍瘡ヲ治スルニ、此ニ方ヲ用  
ユルニ、雁來紅ヲ加テ効ヲトルト如神奇ニ妙、  
可秘々、牛山方考卷上人參敗毒散下

又曰、白芷升麻湯、陳臍瘡年久不愈者ヲ治ス、加  
ノ法ハ敗毒散ノ條ニシルス 同卷下

蘭室秘藏、白芷升麻湯、尹老家素貧寒、形志皆苦、  
於手陽明大腸經分出癰、幼小有癩瘡、其臂外皆  
腫痛、在陽明左右寸脉皆短、中得之俱弦、按之洪  
緩有力、此癰得自八風之變、以脉斷之、邪氣在表、

其證大小便如故、飲食如常、腹中和、口知味、知不  
在裏也、不惡風寒、止熱燥、脉不浮、知不在表也、表  
裏既和、邪氣在經脈之中、內經云、凝於經絡為瘡  
癰、其癰出身半已上、故風從上受之、故知是八風  
之變為瘡者也、故治其寒邪、調其經脈中血氣、使  
無凝滯而已、卷下世四ノウ

灸甘草壹

升麻

桔梗五分

各

白芷柒

分

當歸梢

生地黃

壹錢

各

生黃芩壹錢

伍分

酒黃芩

連翹

黃芪壹錢

貳錢

中桂少許

紅花少許

右㕮咀分作二服、酒水各一大盃半、同煎至一盞。

去粗稍熱、臨臥服一服而愈、

醫說有一種膿瘡、赤腫而痛、用黃連黃檗之類、皆涼藥也、久而不愈、其瘡冷矣、却當用溫藥、如鹿角灰頭髮灰乳香之類、治之當愈、此陰陽寒暑往來之理也、卷十引醫餘ナニノウ

治諸瘡瘍有上下之別

荆防敗毒散ハ、諸瘡瘍ニ効驗イチジルキ方ナレ  
ニ下部ノ瘡熱ナキモノニハ、格別ニ効アルヤウ  
ニ覺ニエズ、本草衍義ヲ讀タルトキニ、八正散ヲ下  
部ノ瘡ニ用タルヲ觀シヨリ、瘡ヲ治スルニ、上下  
ノ別アルヲ知レリ、因テ攷ルニ、龍膽鴻肝湯、香  
川ノ六物解毒湯ナドモ、下部ニ効アリテ、上部ニ  
ハアーリキカヌ欽ト恩ハル、寇氏又小續命湯加  
羌活ノ案ホアリ、先年一男子ノ面瘡癩ノ如ナルス  
其方ニテ大効ヲ得タルヲアリ、並ニ此ニ掲ケテ、  
更ニ他日ノ試験ニ備フ、業廣私說

本草衍義有男子年六十一脚腫生瘡忽食猪肉不安醫以藥利之稍愈時出外中風汗出後頭面暴腫起紫黑色多睡耳輪上有浮泡小瘡黃汁出乃與小續命湯中加羌活一倍服之遂愈卷三

又青黛乃藍為之有一婦人患臍下腹上下連二陰遍滿生濕瘡狀如馬爪瘡他處並無熱痒而痛大小便濺出黃汁食亦減身面微腫醫作惡瘡治不對故如之問之此人嗜酒貪嗜喜魚蠻發風等物急用溫水洗拭去膏藥尋以馬齒莧四兩爛研細入青黛一兩再研勻塗瘡上卽時熱減痛

痒皆去仍服八政散○醫說日三服分敗客熱醫說敗每塗藥得一時久藥已乾燥又再塗新濕藥凡如此二日減三分之一五日減三分之二自此二十日愈既愈而問曰此瘡何緣至此月中下焦蓄風熱毒氣若不出當作腸癰內痔仍常須禁酒及發風物然不能禁酒後果然患內痔卷十青黛

老人食少者壽

徃年同舊藩ニ宮入島セトイヘル老人アリ其人甚少食ニテ、一度ニ一小椀ヲ喫スルノ三十リ。茶ヲ嗜ミタレモ、酒ヲ飲ズ。今甚強健ニテ無病アリ。余嘗テイツゴロヨリ少食ニナリ。王ヒシヤト問ヒタレハ、五十歳餘ヨリ、漸ミ少食ニナリタリト云フ。其人九十二近メ歿セリ。其後モ老人ノ強健ナルモノヲ觀ルニ、多ハ少食ナリ。業廣私說。

醫說、某見數老人、飲食至少、其說亦有理、内侍張則、每食不過簷飯一碟許、濃膩之物、絕不向口、老而安寧、年八十餘卒、茂則每勸人、必曰、旦暮少食。

無大飽。王哲龍圖造食物必至精細。食不盡一器。食包子不過一二枚爾。年八十卒。臨老尤康強。精神不衰。王為予言。食取補氣。不饑即已。餉衆疾。至用藥物消化。尤傷和也。劉元祕監。食物尤薄。僅飽即止。亦年八十而卒。劉監尤喜飲酒。每飲酒。更不食物。啖少果實而已。循州蘇侍郎。每見某。即勸令節食。言食少則臟氣流通而少疾。蘇公貶瘴鄉累年。近六十而傳聞亦康健無疾。蓋得此力也。蘇公飲酒而不飲藥。每與客食未飽已捨匕筯。卷七

并列張太史明道雜志

### 鼻漏腦漏

本間玄謂曰。腦漏ハ病源候論ニ載セ。鼻漏ハ素問ニ出ツ。後世ニ至テ。腦漏鼻漏ヲ一病トシテ論ス。外科正宗ニ。腦漏一名鼻漏ト断リタルハ穩ナラス。予カ歴診スル所ニテハニ證アリ。人壽世保元ニ。濁涕ノ出ル者ヲ鼻漏ト為シ。臭膿ノ出ル者ヲ腦漏ト為シタルニテ、予カ言ノ誣ヒサルヲ知ルヘシ。腦漏ハ必死ニレテ生路ナレ。至テ輕キ者ハ姑ク死ヲ免ル。モ、往并トシテ愈ス。遂ニ死スルモノナリ。瘡科秘錄卷八

### 腦漏病源候論無攷

原南陽曰、鼻淵腦漏八輕重ト見ニ、元來冒風寒シ  
テ病モノ多久酒客ニ多シ、輕證ハ惡臭許リニテ  
膿氣ナシ、風ヲ引タル時ニハ發レ、風邪去レハ其  
證モ退ク也、執筆筭勘ナト、心神ヲ勞スル人ハ、大  
ニ障ルモノナリ、醫事小言卷四下

素問氣厥論、膽移熱於腦、則辛頬鼻淵、鼻淵者、濁  
涕下不止也、傳為齶齶眞目、故得之氣厥也、  
此續醫說古方、鼻淵、卽今之腦漏是也、當分明寒熱  
二證、若涕臭者屬熱、宜用辛涼之藥散之、若涕清  
不臭、覺腥氣者、屬虛寒、用溫和之藥補之、二者不  
可不詳審也、卷九鼻淵室分寒熱

壽世保元、一論鼻流濁涕不止者、名曰鼻淵、乃風  
熱在腦、傷其腦氣、腦氣不固、而液自滲泄也、一論、  
鼻中流出臭膿水、名曰腦漏、卷六

外科正宗、腦漏者、又名鼻淵、摠因風寒凝入腦戶、  
與太陽濕熱交蒸、乃成其患、鼻流濁涕或流黃水、  
點點滴滴、長濁無乾久、則頭眩虛暈不已、卷

按ニ古鼻淵ト名ケ、洞ト名ク後世腦漏ト名久、  
其實ハ一ナリ、但證ニ寒熱虛實ト輕重トアル  
ノミ、薛氏ニ證ヲ分ツ、固ヨリ臆造ノ說ナリ、本  
間氏其說ニ從ヒシハ誤ナリ、

劉君廉夫曰、按鼻淵、後世呼為腦漏、其實非腦之

漏洩乃腦中濁滯下而不止也、論脚識解精微

漏洩乃腦中濁滯下而不止也、論脚識解精微

九味羌活湯治頭痛

舊同僚本木直方通稱安理曰、頭痛寒涼ニ宜シカラズザ

ルモノ、九味羌活湯ヲ用テ效アルトアリ。○按：麻黃附

子細辛湯羌活附子湯ノ意味考合スベシ

按ニ卒頭痛如破轉輾反側スルホドノモノ、右

高骨寒涼ニ安キモノアリ、辛溫細辛ノ類ニ安キ

モノアリ、酒客ノ眉棱骨痛ノ甚キモノニ、黃連

白虎ニ菊花辛夷ヲ加テ治シタルトアリ、人ノ

川芎茶調散ニ石膏ヲ加テ治シタルトモ見タ

リ、サレド甚キ頭痛ニハ、石膏ハ畏ルヘキト比

ヒコレアリ、余弱冠ノ頃、一男子ノ頭痛甚シキ

ニ、柴葛解肌湯ヲ與ル。四五日、一日大便大ニ  
通シ、直視搖搦シテ死シタルフアリ。後ニ攻レ  
ハ、大熱ナク、腹滿ナク、脉力ナク、舌上モ滋潤レ  
テ、唇ノミ乾燥セリ。コレ全ク少陰ノ頭痛ナル  
コト知ラザリレハ、臍ヲ噬トモ及ハズ。其後人  
ノ石膏ヲ用テ誤リタルヲモ、度ニ見タリ。壯年  
煥後ハ、頭痛甚シ。ク頭瘡ト称スヘキモノニハ、  
多ク九味羌活湯ニテ治レタリ。地黃ノ甚キニ鮮  
レ、吐方ヲ用ルコト、古人モ云タレ。未試瘀厥  
頭痛ト云アヘキモノハ、先ハ緩慢ニテ、導瘀湯  
半夏天麻白朮湯ナド效アルフアリ。一男子ノ頭

痛甚シク、阿片ヲ用テ、不圖言語スルコト得ズ。  
其苦ムトコロヲ問ヘハ、唯頭上ニ相モノニ、侯  
氏黒散ヲ用テ治シタルフアリ。コレハ風癲ヲ  
治ストイヘル文ニ據リレアリ。

本集卷一卷十二ニ、頭痛ノ載ダレハ、參看參ヘ

シ。

段酉與子正傳、產後血運、用鹿角一段、燒存性、出火毒為末、酒調灌下、即醒、卷七引丹溪

鹿角治產後血暈及下血本集卷十六  
當參看  
本木直方曰、產後血運、鹿角霜二三分、白湯二  
テ服ルニ、竒效アリ。

食料本草、產後血暈、寒熱往來、或血搶心、鹿角燒  
為末、酒調服、日夜數服驗、但以產後未可飲酒、以  
童子小便調服爾。資生經  
觀聚方引  
本集卷九引

便產須知、鹿角燒灰、產後血暈、鹿角燒灰出火  
毒、右為細末、好酒調下、即醒、行血極快。舊板觀聚  
本集卷九引

千金方、香豉湯、治半產下血不盡、苦來去、煩悶欲  
死方、香豉一升半、以水三升、煮三沸、濾去滓、內成

末鹿角一方寸匕。頓服之。須臾血自下。鹿角燒亦得。卷二

又治產後下血不盡。煩悶腹痛方。鹿角燒成炭。擣篩。煮豉汁。服方寸匕。卷三

婦人良方。治婦人漏下不斷方。鹿角燒灰細食前溫酒調下二錢。卷一

又治妊娠墮胎。下血不盡。苦煩滿欲極時。發寒熱。狂悶方。鹿角屑一兩。熬右以水一大盞。煎豉一合。取汁六分。分為三服。調鹿角屑二錢服。日三服。本須臾下血。古今錄驗同。卷十三

### 病字

香月牛山ノ國字醫叢ニ。諸病多ク火ニ屬。ノ病字丙ニ从火。疾字火ニ从火。コノ書先年杂藏シタノテ正スヘシノ記ス。他日本書ノ得テ正スヘシノ記ス。

宋王遠臘海集云。脉有七表八裏九道。計二十四見之於叔和脉訣。而數脉獨無所屬。蓋數者陰陽氣血皆有餘。脈道之太過。而不得其中。之謂真病脉也。所見則為病。隨其陰陽上中下而察之。又况病之為字。從丙。丙為火熱。是以十分病證常有三分熱。三分寒。不然何以五臟六腑止言火而不言水耶。人身類於水耶。

鼻息利

大病人ノ鼻ソヨクキクハ虛危篤候ニテ甚佳候ニアラズ素問調經論ニ氣有餘則喘欬上氣不足則息利少氣高世栻ノ注ニ息利。鼻氣出入也。コノノ息字ハ呼吸ニハアラス。息字ハ鼻ニ从フ字ナリ。王冰注ニ鍼經曰。肺氣虛則鼻塞不利ニ作レ。憑仰息也。今本靈樞本神篇ニハ。鼻塞不利ニ作レ。凡脉經ニ鼻息利ニ作り。大素ニ息利ニ作レハ。今本靈樞ハ誤ナリ。或ハ馬玄臺ノ今本靈樞ヲ引タルニ據リテ息不利ニ作りタル方宜レカラント云ヘル人モアレ。モ實驗スルトコロニテハ。是ニア

ラズ業廣私說

凡大病人ノ外ノ訣トツリアハズ、耳目ノ聰明ナルモ、鼻ノキクト一理ニテ、多ハ死ニ瀕スル

モノナリ、鼻休ニカト大妻ニ息休ニカト

靈休ニ本靈休本神休本神休本神休本神休

休休ニ本靈休本靈休本靈休本靈休本靈休

字ハ半火ニハヤニス息字ハ鼻ニ以ニ字ナリ王

陳心康高世由人云ニ息休鼻屎出入人也。人息

天火寺門頭寺命ニ序有氣便諸教主焉不冥瞑身

大蘇入人鼻火日火キヘハ靈則ニ天甚卦則ニ火

鼻息休

大病神氣療者近死

大病人ノ神守燎ニ或ハ肝氣亢リ、種ニ世譜ヲヤ  
クモノ、徃ニ死ニ近シ、其精神乱レザルヲ以テ佳  
候トスレハ、急變アルモノナリ、所謂燈火將滅必  
添其光ノ類ナリ、靈樞壽火剛柔篇ニ平人而氣勝  
形者壽、病而形肉脫、氣勝形者死、形勝氣者危矣。業廣

私說

研音草同原野肉理深解者次研却處廣見取安  
奉其夫入縣セリ。重研吉大福系源平人而尋却  
剣イスノハ急變今ナニ人ナリ。前體登大伏與  
伏人卦ニ承ニ立ニ其卦承之。并以太乙爻卦  
大泰入人軒宇劍後ハ刑房承之。軒ノ世號大甲  
大泰入人軒宇劍後ハ刑房承之。軒ノ世號大甲  
舊同藩鍼段内藤良之曰、發狂シタルモ人長強ニ  
灸スルニ奇效アリ。  
上毛高崎驛諏訪良堅ノ父曰、名ヲ失曰、發狂スレ  
ハ食ヲ貪ルモノナリ。其ニニスレハ治スルノ  
ナシ、嚴レク食ヲ禁スヘシ。四五日位ハ、絶食ニテ  
モヨレ。

靈樞癲狂篇灸骨骭二十壯。

素問病能論、奪其食即已。夫食入於陰、長氣於陽、  
故奪其食即已。

紫根耳聰明丸

本草綱目卷之五食中引夫食以養氣則康

靈砂散耳聰明丸二十粒

子母丸

遺傳會禁大之四五日或數日後會三六  
分食之令食三十人十人其一。二十六人皆入「  
土子高」。其藥蒸之。身望父時。其日發汗不  
炎火。川ニ古方也。

竇同菴贈號內難身之曰發汗。三十人。身識之

發汗灸風寒。竇會

紫根治聰耳及頑瘡

池田京水先生曰。紫根一味。麻油ニ煮テ。ドロくス  
ル度トシ。滓ヲ去リ。紙撫子ニツケ。耳中ヘサス。小  
兒聰耳ニヨレ。血熱ヲサマスモノナリ。

大淵君棟軒曰。紫根ヲ麻油ニ漬ス。一數日。諸瘡ノ  
愈ザルモノニ。真綿ヘヌリツケテ傳ク。頭瘡ノ頑  
固レ。年ヲ經タルモノナドニ。別テ效アリ。絶テ内  
攻レタル「ナシ」。

國之幸。臣等叩頭。臣等叩頭。臣等叩頭。

秀田京外未吏日禁脉一禁脉再禁之十日入又  
一禁脉於解更久而發

卷之二



